

### 第3回ライブニッツ研究会発表要旨

## ライブニッツにおける実体の結合 union

田子山 和歌子(慶應義塾大学)

ライブニッツの実体論において、実体の結合 union はどのようなものか。彼において、実体における結合は、一致 accord ないしは調和 harmonie と呼ばれるものである。ライブニッツによれば、実体同士は、物理的な影響関係を持たないにもかかわらず、一方の変化が他方に応じるよう、創られている。あらかじめ対応し合うよう創られた、こうした異なる実体間の一致ないし調和こそ、彼が実体の結合というところのものである。

異なる実体同士が、一致ないし調和関係にあることを、実体の結合とみなすライブニッツの理論は、予定調和説と呼ばれ、ライブニッツの実体論の大きな特徴となっている。そして心身の一致もまた、彼にとっては、心身が実体であることから、予定調和説により説明される。こうした予定調和説は、しかし、彼の同時代人に全面的に受け入れられたわけではない。事実、トゥルヌミーヌ Tournemine は、『トレヴー学報』掲載の論考「心身の結合に関する推論」(1703年5月号)で、ライブニッツが考えるような心身の調和関係は、心身の「真の結合 union réelle にはなりえない」と批判している。彼によれば、予定調和説における心身の結合は、外的な結合に過ぎないというのである。

では、トゥルヌミーヌにとって、心身が真の結合を有するとはどういうことか。トゥルヌミーヌは、心身は、本質的な依存関係 dépendence essentielle にある場合に、真の結合を有すると考える。心身は、むしろ、異なるものとして区別される。が、しかし、こうした異なるもの同士も、一方が存在しなければ他方も存在し得ない、相互不可欠な依存関係にあるとき、それらは真の結合を有するというのである。

以上のトゥルヌミーヌの見解から導かれる重要な論点は、心身が真の意味で結合するとは、結局、心身が一つのものとして存在するということと同義だということである。このような観点からすると、ライブニッツの予定調和説における心身の結合は、一つのものであることを含意しないことになろう。彼にとって心身は、影響関係のない異なる実体であり、それ自体で一つのものといえる。よって、これらの実体は、調和関係にあっても、両者が一つになる必然性はない。これをトゥルヌミーヌは、完全に釣り合った二つの時計にたとえている。二つの時計は、どれほど調和していても、一つになることはない。調和という意味での結合は、その結合が厳密な意味で一性をもつことを含意しないのである。トゥルヌミーヌが予定調和説における心身の結合を「外的結合」とみなす理由はここにある。

予定調和説において、心身の結合は、厳密な意味での一性の根拠をもち得ない。しかし、心身の結合が一性の根拠を持たないという理解は、ライブニッツ自身の実体理解から離れたものになるのではあるまいか。というのも、ライブニッツにおいても、カエサルのような、心身の結合は、

一性を持つと考えられているからである。こうした一性をもつ心身の結合が個体と考えられているのである。このことについて、ライプニッツはどう答えるのか、検討したい。予定調和説は実体結合問題の一つの有効な説明であったが、その理説自身が、実体概念の再検討を促す大きな問題をはらんでいたのである。